

大統領「白バラ」追悼記念講義と戦後ドイツの国民物語：

ヴァイツェッカー／ラウ／ガウク

古川裕朗

(受付 2015年5月29日)

はじめに

「白バラ」はミュンヘン大学の学生を中心としたナチス・ドイツ時代のレジスタンス・グループである。現在では、大学生以外の様々な人々がその抵抗運動に関わり、各都市との連携もあったことが知られている。「白バラ」が反ナチの第1号ビラを配布したのは、1942年の6月から7月にかけてであった。ミュンヘンの各家庭に、ある日突然ビラが郵送されてきたのである。独ソ戦が始まってすでに1年が経過していた。「白バラ」のビラは、その後、1943年2月までに計6種類が作成され配布されることになる。

事件は1943年2月18日に起きた。「白バラ」の中心メンバーであるハンス・ショルと妹のゾフィが、昼間のミュンヘン大学構内で第6号ビラを頒布したのである。その中には、採光吹き抜けホールの上階から階下に向けて撒き散らされたビラもあった。大学の用務員がショル兄妹を発見し捕まえる。二人は大学総長のもとに連れて行かれ、ゲシュタポに引き渡された。その後、二人は尋問を受けることになる。次の日の19日には、仲間のクリストフ・プローブストも逮捕された。プローブストが書いたビラ草稿をハンスが持っていて、そこから足がついたのである。その数日後の22日には、早くも人民法廷にて裁判が行われる。有罪となった三人は即日のうちに処刑された。やがてアレクサンダー・シュモレルとクルト・フーバー教授も逮捕され、同年7月13日に処刑される。その後、同年10月12日にヴィリー・グラーフが、終戦直前の1945年1月29日にはハンス・ライペルトが処刑された。

戦後、「白バラ」の抵抗運動は、ドイツの良心を示すものとして人々の注目を集め、ドイツのナショナル・アイデンティティを表現する一種の“国民物語”として様々に受容されることになる。「白バラ」に関する多くの研究書や伝記が出版された。「白バラ」を題材とした映画も幾つか制作され、それらは高い評価を受ける。

そうした中で、現在ミュンヘン大学ではこの「白バラ」事件において犠牲になった人々の追悼記念講義が行われるようになった。節目の年にはドイツ連邦大統領も講義を担当する。本稿が関心を寄せるのは、大統領によるこの追悼記念講義である。元来、大統領が公に発したスピーチには、当然のことながらドイツの国益に適う強い政治的意図が含まれている。大統領の

言葉は、国内外に向けて、ときに連帯の、ときに牽制のメッセージとして響く。

そうした政治目的のためには、美的情感的 (ästhetisch) な国民物語が利用されることも少なくない。よく知られているものとしては、例えば、戦後ドイツの40年をユダヤ民族の苦しい荒れ野での40年になぞらえたヴァイツゼッカー大統領の演説を挙げることができる。ヴァイツゼッカーのこの演説については、しばしば日本国内においては道徳性の観点からのアプローチに偏りがちであった。しかし、次世代のドイツ国民のためにヴァイツゼッカーがその先の国民の生きていく道を模索しようとしたそうした政治性を無視してはならない¹⁾。この演説において特に注目すべきは、いわゆる「ドイツ特有の道 (Sonderweg)」論を牽制する働きを持っている点である。英仏とは違ってブルジョア革命を成功させることができなかったドイツは、必然的にナチズムへの道を辿ったとする歴史観が、「ドイツ特有の道」論には通底している。本源的にナチズムへの道が定まっていたと理解されるとき、ドイツ人のナショナル・アイデンティティが健全な形で維持されることは難しい。そこでヴァイツゼッカーの演説は、そうした歴史観に対する有効な政治的牽制として機能するところとなる。戦後50年の演説で明言しているように、ヴァイツゼッカーは、ナチの時代をドイツ史における「異常で非連続的な一章」であり、「例外的」なものであるとみなす。本来、歴史の不連続性を主張することはナンセンスであろう。ところが、ヴァイツゼッカーは、1945年5月8日をナチから解放された歴史の出発点であったと戦後40年の演説においても位置づけている。すなわち、ここでも、「ドイツ史の悪しき連続性を政治的に断ち切ること、将来にわたるナチズムとの絶縁を国内外に公言すること」が意図されていたのである²⁾。こうしてヴァイツゼッカーは、歴史の本来の連続性を政治的な物語化を通じて切断し、ドイツ人が自分たちの戦後の歩みを新たに美的情感的な国民物語として享受し得る可能性を開いたのである³⁾。

さて、本稿は以上のような国民物語の可能性を、大統領「白バラ」追悼記念講義の中に探るものである。以下では、処刑後50年 (ヴァイツゼッカー)、60年 (ラウ)、70年 (ガウク) の記念講義を取り上げ、そこに潜在する国民物語の姿をそれぞれ明らかにしたい。

-
- 1) この指摘については、川合全弘「西独の国家理性としての過去の克服：ヴァイツゼッカー演説の政治的意義について」『産大法学』第42巻04号 (2009年) を参照。
 - 2) 歴史の不連続性に関する指摘については、同書、17頁を参照。
 - 3) ヴァイツゼッカーが戦後のドイツ史を荒れ野でのユダヤ民族の苦難と重ねて語ったことは、対外的な牽制としても機能し得る。特に「ドイツ人であるというだけの理由で、粗布の質素な服を身にまとい悔い改めるのを期待することは、感情をもった人間にできることではありません。」(永井清彦編訳『言葉の力 ヴァイツゼッカー演説集』岩波現代文庫、2009年、10頁) というくだりは、強い意味を持つ。これは、罪の道徳的責任 (Verantwortung) 論と補償の政治的責務 (Haftung) 論とを区別する議論の一環で述べられた一節である。「粗布」の服を着て行われる「悔い改め」は、旧約聖書におけるユダヤ人の習慣を暗示する。大統領は、当時の個人的な罪を次世代の無実のドイツ国民全体に拡張して道徳的観点から一律に集団的な贖罪を求めるとは、ナチだけでなく多くのキリスト教徒がユダヤ人迫害の際に利用した論理に通じるとして、政治的観点から牽制している。

1. R・v・ヴァイツェッカー

処刑後50年追悼記念講義（1993年2月15日）⁴⁾

第6代大統領（統一ドイツ初代大統領）リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー（Richard von Weizsäcker：在任1984-94）の追悼記念講義に関して、その政治的メッセージの主旨を捉えたとすれば、それは自由な民主主義社会における「国民（Bürger）⁵⁾の義務（Verantwortung）と連帯（Solidarität）」の重要性を訴えることにあると言える。そうした中でヴァイツェッカーが懸念するのは、政治（家）と一般国民との乖離である。国民は一方において自分たちを政治の「担い手（Träger）」ではなく、政治の「消費者（Konsument）」であると見なし、政治に対して自分の利益のみを要求する [S. 26]。他方、政治に対して理想ばかりを求める知識層の国民は、その反動の結果として「嫌気（Verdrossenheit）」を募らせる [S. 32]。あらゆる政治的理想を机上の空論と見なし、現実的利益の過度な追求を押し進めることも、柔軟性を欠いた理想論を掲げることで道徳的狂信に陥り、現実の政治に関心になつてそこから退くことも、政治において適切ではない。ヴァイツェッカーによれば、双方とも「非政治的（unpolitisch）」であり、「道徳（Moral）と利益（Interessen）の一体化」こそが政治である [S. 34, 36]。

ヴァイツェッカーが「白バラ」追悼記念講義の中で描き出した国民物語は、概ねこうした道徳的理想と現実的利益の一元化という図式の中で描かれることになる。その際、物語言説の背景にあるより広範な政治的意図に関して言えば、総じてかの「ドイツ特有の道」論からの脱却を促す意図があったと考えられる。そうした意図は、「白バラ」運動が失敗に終わったとする従来の「白バラ」観を、ヴァイツェッカーが批判的見地から直接的に取り上げていることから明瞭に読み取ることができる。

多くの人々が自分たちと同じように考え、その呼びかけに応じてくれるであろうというミュンヘンの学生たちの期待は満たされませんでした。命運を賭した彼らの行いは挫折したものと感じられました。「白バラ」は、本当に今日の私たちにも関わりのある始まり（Beginn）であったの

-
- 4) Richard von Weizsäcker, *Die freiheitliche Demokratie bedarf der Verantwortung und Solidarität ihrer Bürger*, erläutert von Mineo Osawa, Dogakusha, 1993. [ヴァイツェッカー（永井清彦編訳）「無関心の名の、心に着せた外套を脱ぎ給え」『言葉の力 ヴァイツェッカー演説集』（岩波現代文庫、2009年）。] 引用・参照箇所については、本文中に頁数を記す。
- 5) Bürgerという言葉は「市民」と訳すことは、本来、妥当である。しかし、このドイツ語には、公権力へと有機的に接続する政治参加の主体といった意味が含まれている一方で、日本語の「市民」には単なる住民というニュアンス、場合によってはむしろ公権力と鋭く対峙するというニュアンスが色濃く反映されている。それゆえ、本論ではあえて「市民」を避け、その都度の文脈に応じて適切な訳語を与える。

であろうかという疑問が繰り返し浮上しました。彼女らは、そもそも政治的伝統の出発点になり得たのだろうか？ 彼女らは実際には、宗教的に根を下ろした、素朴なドイツの教養的中産階級 (Bildungsbürgertum) の理想主義を単に表明したに過ぎなかったのでは？ 彼女らの道徳的な行いは私たちの歴史にとって忘れ難いものになりましたが、それにひきかえ、この道徳的な完全無欠さを政治的合理性と結びつけることが必要なのに、それをなす力が彼女らには欠けていたと言われました (特にクリスチャン・ペトリ『処刑される学生たち』を参照せよ)。

したがって、疑い深い人たちは、彼女らの中に格別新しい政治的始まり (Anfang) を見ることはなく、1848年、自分たちの理想もろとも剥き出しの権力に屈し、それ以来もはや有効な政治的推進力を生み出していなかったドイツ中産階級の非政治的な振る舞いの延長線上に彼女らを見たのでした。これにより、我が国に特徴的な精神と権力の溝も深まったというのです。政治は今や汚らしく、非道徳的であると見なされるというのです。悪に対する「白バラ」の抵抗は、単に愛に発する改心への呼びかけとしてのみ理解され、実際には政治や歴史からの離反を意味しているということになりました。[S. 14, 16]

この引用文中において言及されている「始まり」の概念は、ゾフィ・ショルに由来するものである。いわゆる人民法廷 (Volksgerichtshof) においてゾフィが、裁判長フライスラーからなぜこのようなことをしたのかと問い質された際、彼女は「誰かが始め (anfangen) なければならぬ」と答えた。ヴァイツゼッカーは、ゾフィのこの言葉に着目し、そこに新しい政治的起点としての象徴的意味を読み取ろうとしたのである。

しかしながら、C・ペトリの著作のサブタイトル「白バラと挫折」においても示されているように、従来の「白バラ」観においては、運動に一切の実践的な有効性を認めないわけではないが、結果として「白バラ」運動は失敗に終わったという見方が主流であった。そうした見方の根底には、1848年の三月革命に失敗したドイツ人がずっと挫折感を持ち続けているという考え方が⁶⁾ある。すなわち、ブルジョア革命に失敗した教養的中産階級の間には政治的なものに対する怨恨が生じ、それが20世紀中葉においても尾を引いていたというのである。革命を成し遂げられなかった中産階級の人々は、現実の権力行使に対する精神運動の無力さを思い知らされた一方、「政治的」であることを「非道徳的」であることと同一視することによって政治に対する自らの不関与を正当化した。「白バラ」もこの点において同類であり、彼女らがピラによって訴えようとした内容が宗教的・道徳的な理想論に留まっていたことが、運動の政治的な素朴さと限界とをよく表していたという。

「白バラ」運動に対して着せられたこのようなドイツ国民の“挫折物語”と呼ぶべきものが、かの「ドイツ特有の道」論と符合しているということ指摘するのは難しくない。ヴァ

6) Vgl. Christian Petry, *Studenten aufs Schafott, Die Weiße Rose und ihr Scheitern*, München, 1968, S.147. [C・ペトリ (関楠生訳)『白バラ抵抗運動の記録 処刑される学生たち』(未来社, 1971年), 253頁を参照。]

イツゼッカーは、こうした挫折物語に対して異を唱えたのであった。ヴァイツゼッカーが目論むのは、従来の「白バラ」観が前提とする“宗教的・道徳的理想主義”と“政治的現実主義”との図式的な二元論的枠組みを止揚し、「白バラ」運動の意義を古代・中世ヨーロッパ以来の政治的・倫理的伝統の中に位置づけ直すことである。

私たちが答えに近づくとすれば、それはただ初期段階から現在に至るまで政治の全歴史展開に目を向ける場合のみです。ギリシア人にとっては、政治において大事なのが実践的に応用された哲学でした。その中で重要な位置を占めたのは、公共体を公正に形成することであり、倫理的な法律です。公民（Bürger）は、ポリスに参加してその品位名誉を守るのが正しいとされました。

そこからスコラ哲学が、中世のキリスト教的世界像のための規範、そしてその世界像に義務づけられている諸侯のための規範を引き継ぎました。ルネサンスになると、世俗政治はキリスト教的に媒介された倫理的な目標設定から解放され始めました。マキャベリは、権力を獲得・維持することが政治の内実であるということを理論的に基礎付けました。彼と共にいわゆる現実政治（Realpolitik）の歴史が始まったのです。それは、政治家の質に応じて良くも悪くもヨーロッパ諸国の運命を我らが世紀の後々まで規定しました。国家社会主義は、権力を巡る闘いを、生死を賭けた敵と味方の闘いとして「全体化」しました。

このような環境の内奥に向かって、「白バラ」はピラを書き綴ったのです。「白バラ」は憚ることなく、ドイツ国民（Volk）にアリストテレスの、そしてキリスト教の倫理学を思い出させました。「白バラ」は、自由と正義を要求しました。「白バラ」は、人倫の義務と良心について語りました。カントの定言命法を確信させるものとして、これほどの事例はありませんでした。クルト・フーバー教授も、人民法廷でこのカントの定言命法を引き合いに出したのです。これは「現実政治」ではありませんでした。しかし、だからと言って政治でなかったのでしょうか？

それは、政治以上のものでした。マキャベリに発する伝統との決別でした。ピラでは国家形態について、はっきりと述べられていたわけではありません。しかし、あらゆる国家における倫理的価値の必然性について述べられていました。今日の私たちの政治にとっても、まさにこの問題以上に重要なものではありません。[S. 22, 24]

ヴァイツゼッカーが指摘しているのは、古代ギリシアにおける政治と倫理の一体性であり、中世キリスト教世界におけるそうした政治的・倫理的精神の継承である。その後、ルネサンスのマキャベリにおいて政治と倫理の離反が始まり、権力の獲得を目的とするこの政治の現実主義がヨーロッパ中に広まる中、それがナチス・ドイツにおいて極まりを見せたというのが、ヴァイツゼッカーの主張するところである。さらに、ヴァイツゼッカーによれば、このマキャベリズムに終止符を打ち、古代ギリシアと中世キリスト教世界の政治的・倫理的一体性を取り戻すための先鞭をつけたのが、まさにこの「白バラ」に他ならないというのである。

「ドイツ特有の道」論との兼ね合いで見たとき、ここには極めて大胆な解釈が潜んでいると言わねばならない。まずナチズムがマキャベリズムの延長線上に位置づけられることによって、ナチス・ドイツの特殊性が薄められることになる。確かにナチズムにおいて全体化され

た権力闘争の有り様は大変に極端なものであった。とはいえ、この権力を巡る争いそれ自体はルネサンスのマキャベリに起源を持ち、ヨーロッパ一般に見られる現象であって、ドイツに特有のものではない。こうして、ナチス・ドイツはドイツ固有の歴史の中ではなく、ヨーロッパ一般の歴史の中で連続性を与えられる。ところが、一方においてナチズムを含むこのマキャベリズムの歴史自体がヨーロッパ史において例外的な道であったともされ、この歴史はヨーロッパの正統な精神史の連続性の外に置かれることになる。古代ギリシアの政治的・倫理的精神は、中世キリスト教世界を経て実はカントに代表されるドイツ哲学に密かに引き継がれていたのであり、「白バラ」はこのドイツ精神を通じてヨーロッパの正統な政治的・倫理的精神を復活させたというのである。ここに「ドイツ特有の道」論は消滅する。ドイツの歴史は特殊なものではなく、むしろヘレニズムとヘブライズムとが重なり合うヨーロッパの正統な「政治的・人倫的文明 (politisch-sittliche Zivilisation)」の重要な一翼を担うものとして捉え直されることになった。ヴァイツェッカーは、このようにして「白バラ」を巡るドイツ国民の“挫折物語”を“復活物語”へと書き換えたのである。

2. J・ラウ

処刑後60年追悼記念講義 (2003年1月30日)⁷⁾

第8代大統領ヨハネス・ラウ (Johannes Rau : 在任1999-2004) の追悼記念講義の最後は次のような言葉で結ばれている。

「白バラ」のメンバーは抵抗運動を通じてドイツの歴史を刻み (schreiben) ました。これは私たちみんなに対する一つの課題 (Auftrag) であり続けます。[§ VIII]

この言葉がドイツ国民に対する何らかの政治的メッセージを含んでいるのは明らかである。とはいえ、直前の文脈と関連づけてみたとき、最後のこの言葉がやや唐突な印象を与えるのは確かであり、そのメッセージの意味が何であるかは必ずしも明瞭であるとは言えない。しかしながら、講義全体の文意を踏まえるなら、ラウが講義の中で描き出したある種の物語的表象がこの言葉を通じて浮かび上がってくるのが分かる。本節ではこれを捉えることにしたい。予め見通しを述べておくと次のようになる。まず「白バラ」が抵抗運動を通じて刻み込んだドイツの歴史とは、戦後のドイツ国民がそれを読み解き、理解することを託された一つ

7) テキストはドイツの連邦大統領公式ホームページのものを利用した。Gedächtnisvorlesung von Bundespräsident Johannes Rau aus Anlass des sechzigsten Jahrestags der Hinrichtung der Mitglieder der “Weißen Rose”, http://www.bundespraesident.de/SharedDocs/Reden/DE/Johannes-Rau/Reden/2003/01/20030130_Rede.html. 引用・参照箇所については、本文中にテキストの § 番号をローマ数字で記す。

の課題である。戦後、長きに渡りドイツ国民はこの「白バラ」の歴史を読み解こうとしてきた。この試み自体がドイツ国民の精神史を形成し、これは言わばドイツ国民自身によるドイツ精神探求の物語となる。総じてラウの講義は、ドイツ国民のそうした探求物語の歩みを振り返るものとなっている。以下では記念講義の論旨を追いながら、この探求物語がどのようなものであるかを探っていきたい。

講義の中でラウがまず焦点化しようとしているのは、「白バラ」事件それ自体だけではなく、後に残された「白バラ」関係者たちが事件後に被った苦しみである。「白バラ」事件には幾人もの大学関係者が加担し、ミュンヘン大学の学生や教授など多くの「白バラ」関係者が犠牲になったが、そうした中で、「白バラ」メンバーの生存者やメンバーの遺族たちも様々な苦しみを味わう。「白バラ」関係者は事件直後、尋問を受け、知人友人は関係者たちを避けるようになった。戦後は、「白バラ」関係者の思いを離れて「白バラ」事件が聖人物語(Legende)として一人歩きしていく中、その一方で「白バラ」事件に加担した大学関係者の処罰は進まず、このことがますます「白バラ」関係者を苦しめることになる。さらに「白バラ」関係者を苦しめたのは、有罪判決を言い渡された「白バラ」メンバーの名誉がなかなか回復されないことであった。司法は責任を取らず、いわゆる人民法廷が「ナチ政府の権力保持のためのテロ手段」であったと認定されたのはようやく1985年であり、その有効性が破棄されたのは1998年であったという。[§ I, II]

講義の序盤においてラウが指摘したのは、戦後長きに渡って続いた「白バラ」に対する実際上の無理解であり、無関心である。戦後のドイツ国民は、「白バラ」事件をそれほど正當に理解しようとは努めてこなかったのではないかと。ここにラウの問題意識がある。それゆえ、ナチズムの過去との取り組みについては、1945年までの事柄だけではなく、その後いかにドイツ国民がナチズムの問題と向き合ったか、そうした戦後ドイツの歩み自体を検証することが重要であるとラウは考える。

ナチズムに対する戦後の取り組みを振り返る上で大切なのは、「個々人の個人的な罪や関与」、「多数者の順応や賛同」、これらを区別することであり、正確に見つめることであるとラウは主張する。その理由は、「全ドイツ人の集団的罪が存在しない」という事実よりも、「集団的な恥があって然るべき」というドイツ人の当為に求められる。戦後長い間、いわゆる「清廉潔白な国防軍」のような聖人物語が、医学界、司法など様々な領域においても存在した。また警察、財務行政、企業、保険業界などの関係者は、当時、単に自身の義務を果たしたに過ぎないとして、彼らが第三帝国においていかなる役割を果たしたかについての議論は退けられた。というのも、議論することで民主主義の社会的安定が危険に曝されるのを人々が恐れたからであるという。だからこそラウは、ナチズムの歴史と取り組むことの中には1945年以前の事柄だけでなく、以後の事柄も含まれると主張する。すなわち、「長い間犯人であるこ

とが否定され、犠牲者への補償はただいやいやながら行われ、抵抗運動を行った人々の中には長い間無視され、しかも中傷されてきた人もいるのはなぜか」、こういった問いと向き合うこともナチズムの歴史との取り組みの中に含まれるというのである。〔§ III〕

ナチズムの歴史との取り組みのためには、「哀悼の作業 (Trauer)」が必要である、とラウは主張する。哀悼することは、「過去を忘れてたり、払いのけたりするため」ではなく、「自己を過去から解き放つため」にこそ必要であり、「過去を自身の生の構成要素とするよう努力する中で」必要になる。このことによってのみ、過去が自分たちドイツ国民を支配することはなくなる。これが、この「ドイツ史の一章に終止符が存在し得ない」理由の一つであり、このことは犠牲者のためでもあり、またドイツ国民自身のためでもある。〔§ III〕

こうしてラウは、戦後のドイツ国民が過去に取り組むことの意義を示す。しかしながら、その取り組みは戦後決して十分ではなかった。特にラウは、抵抗運動を行った人々の存在が、いわゆる英雄を除いて、長い間、無視され、貶められてきた点に言及する。どうしてそのような事態が生じたのか？ そこには様々な理由が存在する。ナチ政府に対する忠誠心、東西冷戦、連合国間の利害関係、ナチ関係者の社会復帰などがその理由として挙げられる。とりわけラウが指摘するのは、そうした抵抗者の存在がナチの加担者にとって都合が悪かったという点である。すなわち、抵抗者の存在は、ナチのテロリズムのもとでは「誰もが加担せざるを得なかった」という自己正当化を不可能にしてしまうからである。自律的な思考を守り、ナチに加担する道を選ばなかった者は、「犯罪者や追随者と並んでもう一つのドイツ人が存在した」という事実を示している。こうした抵抗運動は、「私たちの栄光ある記憶」であるとラウは述べる。したがって、旧東ドイツにおいては、共産主義者の抵抗運動ばかりが評価されたとしても、また旧西ドイツ社会において評価されてきたヒトラー暗殺計画の関係者が、決して民主主義的な社会秩序の構想を持っていなかったとしても、その抵抗運動の価値が減じられるわけではない。〔§ IV, V〕

しかしながら、ラウは改めて問う。いわゆる英雄ではない「白バラ」の人々の抵抗運動は、果たしてそれほど早い時期から正当に評価されてきたのだろうか？ かりに評価される場合であっても、何かを隠すための道具として利用されてきたことがあったのではないだろうか？ ラウが指摘するのは、「白バラ」の抵抗運動は長い間「理想化 (idealisieren)」され、「美化 (romantisieren)」されてきたが、これは「彼女たちの活動の、とりわけ政治的目標設定の脱政治化」であったのではないかという点である。「白バラ」のメンバーの最期は、長い間、「殉教の死」「贖罪の死」として英雄視されてきた。その一方で、メンバーたちは政治構想を持たず、自分たちの行動の危険性も理解していなかったとして、メンバーたちを「若者特有の夢想者」と表現したり、「半分子供」と表現したりする者もいた。「白バラ」の抵抗運動を英雄視するのであれ、矮小化するのであれ、いずれにしてもそこには初めから成功の見込みがな

かったという先入見が含まれている。こうした発想は、ナチに抵抗しなかった者にとって都合であった。どのみち抵抗運動は成功しなかったという認識は、結果としてナチに加担してしまった者の心の負担を軽減する。「白バラ」がなかなか正当な評価を受けられなかったことの理由の一つは、この点にあるとラウは考えるのである。〔§ VI〕

今日では、「白バラ」のメンバーたちが明確な政治構想を持っていたこと、そして自分たちの直面している危険性もよく理解していたということが明らかになっている。彼女たちは、「思考」と「行動」とをしっかりと区別しており、「半分子供」でも「夢想家」でもなかった。「白バラ」のメンバーたちは、すでに様々な知識経験を積んでいた。このことが結果として「思考」に「行動」が続かねばならないという決断に至り、彼女たちの抵抗運動を消極的なものから積極的なものへと変えたのである。ラウは次のように指摘する。

「白バラ」のメンバーたちは、新しいヨーロッパにおける新しいドイツの社会秩序について明確な構想を持っていました。メンバーは、民主主義的・法治国家的原理に基づく戦後秩序を支持していました。新しいドイツとヨーロッパにおいては、人間の尊厳が不可侵の基本的権利となるべきだ、というのです。〔§ VII〕

「白バラ」のメンバーが、他の抵抗グループと何よりも異なるのはこの点においてである。また、ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害が行動する上での重要な動機付けになった点も、「白バラ」が他の抵抗グループと異なる点であった。そうした民主主義的価値観ゆえに、「白バラ」は他の抵抗グループ以上に今日の私たちの社会秩序や価値観と強く結びついているというのである。〔§ VII〕

では「白バラ」の若者たちが、困難なナチの独裁体制下にあって、他の多くの同世代の人々と違った振る舞いのできたのはなぜだろうか、とラウは問う。彼女たちは、ヒトラー・ユーゲントに入っていた時期もあり、様々な勤労奉仕活動にも参加していた。ナチのプロパガンダにも曝されていた。では、何が「白バラ」のメンバーを他の同世代の人々から分かつことになったのだろうか？ よく知られているように、「白バラ」メンバーのほとんどが教養的中産階級出身であった。宗教的に敬虔な家庭に育った者、哲学的な問いに取り組んでいた者、各国の古典や同時代の著作を熱心に読んでいた者などもいた。しかし、ナチに加担した人々の中にもそのような者は存在したのであって、宗教や教養だけがナチズムに対する免疫をもたらしたわけではない。「結局、僕らは政治的に教育されたのだった。」というハンスの言葉にラウは注目する。この言葉の意味をラウは、「自主的な思考、批判の能力、自己批判への覚悟」を身につけることであったと解する。そこには、他者に対する「尊敬」の念も含まれる。「白バラ」のメンバーを結びつけたのは、或る「基本的確信」であった。それは、「あらゆる個々の人間は無比の存在だ」という確信であり、「ただ一人の人間であっても、その尊厳を侵

害する権利は、どんな国家権力であれ、どんな世界観であれ持ち得ない」という確信であった。こうした根本的価値への方向付けは、未来を指し示す。何かを決断する場合は、「内的な価値の羅針盤」が客観的事実と同様に重要となる。だから、「白バラ」は私たちに次のことを思い起こさせる。子供たちにとって、どんな優れた専門教育も、どんな近代的な教養も、「明確な倫理的方向付け」への取り組みを欠いていたのなら、それだけでは不十分である、と。子供たちが持たねばならないのは、「あらゆるグレーゾーンの向こう側には、明らかに正しいことと、明らかに間違っていることが存在する」という考え方であり、「こうした考え方を信じることができるようになるよう子供たちを鼓舞してやらねばならない」。このことは、「子供たちの現在と未来」に子供たち自身が無関心にならないための前提であり、子供たちと共に自分たちの未来を作っていくための前提であり、また必要であれば、「流れに逆らって泳ぐ」ための前提でもあるという。以上のことを「白バラ」のメンバーたちは困難な条件の下で実行したのであり、命を賭した彼女たちの行動は無駄ではなかったとラウは強調する。そうして、「白バラ」の抵抗運動が刻んだドイツの歴史が、「私たちみんなに対する一つの課題であり続ける」という文言によって講義は締めくくられることとなる。[§ VIII]

さて、ここまで講義の論旨を追いながら、「白バラ」に関する戦後ドイツの取り組みを確認してきた。改めてその取り組みの歩みを総括すると次のようになるであろう。

「白バラ」抵抗運動の意義は、戦後なかなか理解されてこなかった。だから、なぜそのようなことが生じたのか戦後のナチズムとの取り組みを振り返っておく必要がある。こうした過去との取り組みは、自分たちのためでもある。「白バラ」の抵抗運動は、ときに英雄視され、矮小化され、そして脱政治化されてきた。こうした理解は、抵抗運動を行わなかった者の正当化のためにも利用された。しかし、やがて「白バラ」の抵抗運動は現代に通じる明確な政治構想や価値観を有していたことが分かってきた。「白バラ」のメンバーたちは、結局、政治的に教育されたのだった。すなわち、自主的な思考、批判の能力、自己批判への覚悟、他者への尊敬の念をメンバーは身に付けていたのである。これが、「白バラ」を他の同世代の人々から分かつことになった理由であった。こうした「白バラ」の抵抗運動は、子供の教育には明確な倫理的方向付けが不可欠であることを改めて思い起こさせる。このことによって初めてドイツ国民は、子供と共にドイツの現在と未来を作っていくことができるのである。だから、「白バラ」の抵抗運動は意義深いものであり、この抵抗運動の歴史の意義を読み解き理解することは、ドイツ国民の課題であり続ける。

以上のようにラウが講義の中で描き出したのは、「白バラ」理解の変遷史であったことが分かる。それは、言い換えれば、ドイツ国民が「白バラ」抵抗運動の内に自分たち本来の精神性を探り当てようとしたドイツ精神それ自体の自己探求的な歩みであった。ラウが描き出したドイツの国民物語とは、ドイツ国民自身によるドイツ精神探求の物語に他ならない。この

精神の探求物語は、ラウが「ドイツ史の一章に終止符が存在し得ない」と述べている通り、容易には完結しない。その際、この文言が、ヴァイツゼッカーの述べたドイツ史における「異常で非連続的な一章」というフレーズと対照をなしていることにも注意が必要であろう。ヴァイツゼッカーは、ナチズムと戦後ドイツの非連続性を強調した。しかし、ラウはむしろナチの歴史を延長させ、そこに戦後ドイツの精神史を政治的に上書きする。こうしてラウは、ナチの歴史を自国の戦後史の中で生産的に消化しようと試みたのである。

3. J・ガウク

処刑後70年追悼記念講義（2013年1月30日）⁸⁾

ヴァイツゼッカーが描き出した物語の主人公は、「白バラ」のメンバーであった。ラウの物語では、集団としてのドイツ国民が主人公であった。では、現大統領ヨアヒム・ガウク（Joachim Gauck：在任2012-）の描き出す物語において誰が主人公になるかと言えば、それは個人としてのドイツ国民である。ガウクの講義の中に描出されているのは、個人としてのドイツ人が自立した一人のドイツ国民（Bürger）へと自らを形成していくことを説く一種の“成長物語”である。

まずガウクは、ヴァイツゼッカーと同様、「結局は誰かがこれを始めなければならない」というゾフィの言葉に着目する。この言葉は、人民法廷においてゾフィが裁判長のフライスラーに投げかけた言葉であった。この言葉が現在の私たちに対して強く訴えるものを含んでいるのは、確かである。しかし、一方において、ある種の疑念が向けられる場合もある。「果たして一個人にいったい何ができるというのか？」「私が始めたとしても、他人がそれに同調してくれない限り、それが何の役に立つのか？」ガウクによれば、ゾフィの言葉に対するこうした疑念は、実は問いの形でカムフラージュされた「無力感の表明」に他ならない。[S. 1/7]

とはいえ、ガウクとしては、この疑念を単なる「無関心」「臆病さ」と見なすことはできないという。なぜなら、自らの行動や能力を実際に達成の見込みのある目的にのみ捧げたいと思うのは合理的な態度であり、何も実りの無いもののために努力を注ぎ、自身を危険に曝したいと考える者は誰もいないからである。もちろん不正に身を任せることを拒否し、自らの命を賭してでも自らが正しいと信じることを貫こうとする態度は「感嘆（Bewunderung）」に値する。「白バラ」に代表されるような抵抗活動を行った人々は、反抗心、純粋な同情心、あ

8) テキストはドイツの連邦大統領公式ホームページのものを利用した。Gedächtnisvorlesung zum 70. Jahrestag der Hinrichtung von Mitgliedern der studentischen Widerstandsgruppe „Weißen Rose“, <http://www.bundespraesident.de/SharedDocs/Reden/DE/Joachim-Gauck/Reden/2013/01/130130-Weisse-Rose.html>. 引用・参照箇所については、A4用紙に印刷した際の頁数を便宜上の目安として本文中に記す。

るいは人道的義務を果たしたいという気持ちなど、様々な動機から行動した。彼女たちが私たちにとって「模範 (Vorbild)」であり得ることは間違いない。しかしながら、そうした模範的人物たちが総じて自分たちの行動を「普通」「当然」と評するとき、私たちはそうした人々を賞賛しつつも、どこかしら「心苦しく (peinlich)」感じることもあるのも事実である。このことをガウクは見逃さない。[S. 2/7]

「白バラ」の「勇気 (Mut)」や「無私の心 (Selbstlosigkeit)」に対する私たちの「感嘆」は、ガウクによれば、自分自身に対する「疑念」と表裏一体である。果たして自分にはそうした勇気や無私の心があるのか、と私たちは自分を疑う。「お前なら当時いったいどのように行動したのか?」、と。だから、私たちは自分自身を「白バラ」の人々と比べたくはない。結果として、私たちは「白バラ」の人々に対する感嘆の念をますます強める。「白バラ」は私たちから遠ざかり、そもそも自分と比較するべくもない存在となる。こうして「白バラ」は、私たちにとっての「畏敬」の対象となったのである。[S. 3/7]

しかし、ガウクは「白バラ」の人々に対してそのような一種の引け目を感じることは的を外れだと主張する。ガウクは、ドイツの若者に向かって次のように呼びかける。

今しがた私は畏敬という言葉を使いました。しかし、この「畏敬 (Ehrfurcht)」という言葉には、「おそれ (Furcht)」という言葉も含まれています。何という間違いでしょうか! 自分は決して強くも勇敢でもあり得ないのでは、などとおそれるなんて! 自分の人生は始まったばかりだということに、人生の中盤や終盤において自分に何ができるかということ私たちが知る必要はありません。おそれが私たちを拘束しなければならないなどということがどうしてあり得るのでしょうか? だって、おそれは私たちを小さくし、弱気にさせるものなのです。とりわけ、より不愉快な認識ということになれば、私たちはそこから逃げ出すものです。確かに私たちは、英雄になること、ましてや殉教者になることをお互いに要求することはできません。しかし、私たちがその都度できることをするというのであれば、私たちはお互いに要求し合うことができます。今の私たちにできること、今の私にできることであれば、きっと私たちは行くことができます。したがって、大事なのは、「当時、私だったら何ができたか?」と問うことではなく、「今の私は何ができるか?」と問うことです。[S. 4/7]

だから、「白バラ」を自分たちが決して到達し得ないような遠くに追いやる必要はないとガウクは述べる。たとえばはっきりとは分からなくても、「白バラ」への道が存在し、そこに辿り着く能力が自分にはあると信じるのが大事である。それゆえ、「感嘆」は自分たちが仰ぎ見るものに対する愛であって、「畏敬」ではないとガウクは強調するのである。[S. 4/7]

ここにガウクの語る物語の核心があると言ってよい。抵抗する能力は持って生まれた天分でもなく、二度と無いたった一回きりの卓越した決断でもなく、人生の中での偶然的な巡り合わせでもない。抵抗の能力は次のように、自ら育むものである。

抵抗は単にそこにあるのではなく、言わば発生論的 (genetisch) に存在しています。私たちは気づくことができました。抵抗は在る (sein) のではなく、抵抗は生じる (werden) のだということ。抵抗は、他人が知りたくないことの背景を調べることで始まり、不正を組織したりそれを実行したりする人々に対して距離をとることで始まります。抵抗は私たちに降り掛かる何かから、そして、それに対して私たちが投げ返した何かから生え出るのである。[S. 4/7]

ガウクによれば、抵抗の能力は、初めからそのまま人間に備わっているものではない。それは、自身の人間的な成長と共に発展させていくものである。このことは、「自由な社会や秩序のために自己を投入する能力」に関しても同様である。こうした能力を獲得するためには、「受け入れられている (Angenommen-Sein) という幼少期の感情」が大切であるとガウクは述べる。この感情は、周りの人々が励ましてくれたり、信じてくれたりすることによって育まれ、そうして私たちは「自己」を発展させることができる。この「自己」は真剣に振る舞うことを学ばなければならず、これによって「自主的であること (Eigenständigkeit)」や「他人と異なること (Andersartigkeit)」への勇気を発展させることができる。こうして「個人 (Individuum)」は抵抗へと向かって歩き出し、その時に初めて何が善で何が悪かの判定を決然と下せるようになる。こうした価値観は理知的に獲得するだけでなく、心の中に深く強い感情として担っておく必要もある。この感情は、不安や疑念を払拭する。「私には善きことをなす能力がある」というこの感情、抵抗の能力はこの感情に基づく。善いと認識したこと、正しいと認識したことのためには、ときに命を賭けてでも実行しようとするそうといった力は、こうした感情にこそ根を下ろすことができるのである。[S. 4/7]

以上のようにしてガウクは、抵抗する能力の萌芽、また社会秩序のために自己を投入する能力の萌芽が人間の中に生じ、それがやがて実際的な力へと発展していく個人の人格の成長物語を描き出した。さらにガウクの成長物語は、民主主義的な社会秩序の形成や維持へと接続する。

ナチの時代において、ドイツ人の多くは、一定の秩序を保った安寧の中で自分たちの権利が無力化されていくことに気づかなかつた。ドイツの国民 (Volk) は、自らの自由を自ら進んで放棄してしまったのである。ガウクの認識では、ドイツが別の道を辿る可能性もあり得た。歴史はそれ以外の道を排除する不可避のものではなく、無数の個人人の行為の結果、あるいは不作為の結果に他ならない。それゆえ、ガウクは現在のドイツの政治に無関心な若者に対して呼びかける。「ぐずってはいけない！ 君たちの国だ！ 君たち自身の中にある力に即して共に国を作りなさい！」ガウクのこの言葉の背景には、20年前にヴァイツゼッカーが行った「白バラ」追悼記念講義の存在がある。かつてヴァイツゼッカーが心配したのは、国民 (Bürger) が政治に対する嫌気ばかりを主張し、自分のことを政治の「担い手」としてよりも政治の「消費者」として理解するようになることであった。そのようなとき、政治家

と国民との間には大きな溝が生じる。そこでガウクは、ヴァイツゼッカーに倣って政治家と国民は対峙する二つの存在ではないことを改めて強調する。政治家とは、自分たちの国に奉仕する責任と義務を期限付きで国民から委託された国民に他ならない。こうしてガウクは、政治家を一般国民の延長線上に位置づけ、両者が民主主義という共通の価値基盤に立つ一体的な存在であることを説く。[S. 5/7]。

政治家を一般国民の延長線上に捉える視点は、ガウクの中でいわゆるドイツ憲法としての基本法とも結びついてさらに深まりを見せる。「人間の尊厳は不可侵である。これを尊重し、守ることがあらゆる国家権力の義務である。」これは基本法第 1 条の中の文言であるが、ガウクは基本法を、国家権力の暴走に対する国民の歯止めであるとは理解しない。いわゆる憲法歯止め論は公権力を担う政治家と一般国民との対立的な分裂を前提とする。ガウクにおいて国家 (Staat) は人間の尊厳を侵すものではなく、むしろ自律的な主体として人間の尊厳を積極的に守る存在である。基本法は、その「宣誓 (Versprechen)」に他ならない。もちろんここでの国家は、ドイツ国民と対峙するものではなくドイツ国民と一体である。だからこそガウクは、人間の尊厳を侵すものに対してドイツ国民として立ち向かう決意を述べる。[S. 6/7]

私たちには民主主義的政党も民主主義的国民 (Bürger) も必要です。民主主義的国民は、他者を排撃しようとする例の者どもを一致団結して排撃します。私たちは、一切の反イスラーム的、反ユダヤ的、また一切の反ドイツ的、極右的、原理主義的な言動を容認しません。私たちは、イデオロギー的・宗教的理由から私たちの国 (Land) に狂信や暴力を持ち込もうとする人々に決然と立ち向かいます。私たちは、たとえ誰が誰に対してなそうとも、排斥や暴力を黙認しません。そうした排斥や暴力が自国の人々の中のマイノリティから発したとか、移民の中のマイノリティから発したとか、それは関係ありません。排斥や暴力がたとえ誰から発しようとも、それは関係ありません。偏見、侮蔑、憎悪との闘いは、ときに不快で難儀な試練であり、ところによっては常に危険な、日々の試練なのです。[S. 6/7]

こうした決意において、個々のドイツ国民は民主主義的な価値観の中で互いに連帯し、排斥と暴力に対して抵抗を行う主体となる。国民としての決意は、国家としての決意に等しい。以上のようにして、個々のドイツ人が抵抗の能力を身につける人格の“成長物語”は、さらに民主主義的な連帯を通じて抵抗を行うドイツ国民としての“成長物語”へと結実するのである。

お わ り に

最後に、これまで検討してきた「白バラ」追悼記念講義における大統領 3 名の国民物語を、その政治的効用と共に整理しておきたい。まずヴァイツゼッカーが描き出した物語は、「白バ

ラ」の抵抗運動がヨーロッパの伝統的な政治的・倫理的文明を蘇らせたとする一種の復活物語であった。「白バラ」のメンバーを主人公とするドイツ国民物語の政治的効用としては、「白バラ」を巡る従来の挫折物語を否定することで、それが背景に持っていた「ドイツ特有の道」論を払拭するという意義が考えられる。次いでラウが描き出した物語は、「白バラ」の抵抗運動が刻んだ歴史を、戦後のドイツ国民が読み解き、その中にドイツ本来の精神性を探り当てようとするドイツ精神探究の物語であった。戦後のドイツ国民全体を主人公とするラウのドイツ国民物語は、かつてヴァイツゼッカーがナチの時代を指して呼んだドイツ史における「異常で非連続的な一章」をむしろ連続的に延長させ、そこに戦後ドイツの取り組みを政治的に上書きする。これによって、ナチの負の歴史を自らの戦後史の中で生産的に消化しようと試みたのである。そして、ガウクが描き出した物語は、個々のドイツ人が抵抗の能力を身につけるようになる人格の成長物語であった。ドイツ人個人を主人公とするガウクの物語は、最終的に民主主義的な連帯を通じて非民主主義的な価値に対して抵抗を行い得るようなドイツ国民への政治的成長を促す物語でもある。

Abstract

Gedächtnisvorlesungen des Bundespräsidenten über die „Weiße Rose“ und Volkserzählung im Nachkriegsdeutschland: Weizsäcker, Rau und Gauck

Hiroaki FURUKAWA

In der Gedächtnisvorlesung des Bundespräsidenten zum Jahrestag der Hinrichtung der Mitglieder der „Weißen Rose“ werden deutsche Volkserzählungen dargegeben. R. v. Weizsäcker schilderte die deutsche Volkserzählung, in der die Mitglieder der „Weißen Rose“ durch ihren Widerstand begannen, eine traditionell politisch-sittliche Zivilisation in Europa wiederzubeleben. J. Rau schilderte eine deutsche Volkserzählung, in der das deutsche Volk in der Nachkriegszeit den eigenen Geist in der von der „Weißen Rose“ geschaffenen Geschichte des Widerstands gesucht hat. Gauck predigte darüber, dass das deutsche Volk den Mut zu Eigenständigkeit und Andersartigkeit entwickeln, und somit zu jenen Bürgern werden solle, die als Individuum fähig sind, Gutes zu tun.